

1 単元名 「くじらぐも」

2 単元目標 場面の様子を想像し、その様子が表れるように声に出して読むことができる。

### 3 ひびきあう子どもたちをめざすための指導の工夫

1年生の子どもたちにとって、「ひびき合う」というレベルは非常に高度である。そのため、低学年ブロックとして、素直に自分の思いを表現できるということをまずはスタートとして研究をはじめた。意見をはっきり聞こえる声で発表するところから始め、徐々に相手意識を持った発表ができるように声かけをし、できたことを大いに認めていった。また、全体での発表だけでなく、ペアやグループでの対話の仕方を教え、相手意識を持った発表をする基礎部分を養った。その結果もあり、子どもたちは本時にいたるまでの間、徐々にではあるがひびき合いの基礎になる素直に自分の思いを表現できるようになってきた。まだまだ、全体の中でひびき合うようなレベルの高いものには至っていないが、1年生という実態を考えると、まずは相手意識を持った発表や聴き方が基礎になると考えている。

### 4 単元と指導について

教材文「くじらぐも」は、想像力を広げて楽しく読むことのできる物語である。体育の授業時間という身近な現実の中から、ふいと幻想の世界に入り、想像の世界で存分に遊んだ後に、また現実の時間と空間に戻るという児童が安心して空想の世界に遊ぶことができる設定になっている。読み手である児童は、いつしか物語の中の1年2組の子どもたちと一体化して楽しく読み進め、想像を広げていくことができるであろう。雲の上に乗り大空を駆け巡るという自分たちの夢を叶えたようなお話に、児童は共感し意欲を持って楽しく読むことができるであろう。

また、挿絵や言葉を手がかりに、場面の様子を容易に想像することができる。そのため、子どもたちは、会話文をくじらと子どもになってやり取りするうちに登場人物になりきり、声に出して読むことの楽しさを感じ、場面の様子をより豊かに想像することができると思われる。また、文型の繰り返しや言葉のリズムのおもしろさがあり、楽しく音読するのに適した教材である。

さらに、子どもたちとくじらぐもの位置関係に気付いたり、動作化を取り入れ登場人物になりきって考えたりすることで、声の大きさや読む速さなどを意識して読むこともできる。その上、リズムカルな会話文や繰り返しの表現に着目し音読することで、声に出す楽しさや声を合わす気持ちよさを感じ取ることもできる。ここでの学習は、読みの力を生かして、登場人物の心情を受け止めたり、読んで好きなところを見つけ読書の楽しさを深めたりする12月教材「ずうっと、ずっと大すきだよ」の学習へとつながっていく。

#### 《切実な問題について》

この教材文をただ読ませても子どもたちに切実な課題意識は生まれない。そこで単元を貫く言語活動として『音読発表会』を取り入れることで、課題意識を持った読み取りをさせていきたい。本学級の児童は、7月に「おおきなかぶ」の音読発表会を行っている。その映像を第一時に見せ、それをきっかけに「もっと上手に音読ができるようになりたい。」「お話を読んで、読み方の工夫できるところを見つけたい。」といった切実な課題意識を持たせたい。この課題意識を持たせることで、単元を通して『音読のための読み取り』をさせていく。

また、音読発表会に向けて、学級全体で読みを深める時間を設定するだけでなく、音読発表会に向けてグループの子どもたちで音読を工夫させる時間もとっていく。7月の「おおきなかぶ」では、読み取った部分の工夫に重点を置いていたが、本単元では子どもたち自身に考えさせる部分を残しておくことで、切実な課題意識をより持たせたい。

#### 《ひびき合いについて》



現在、ひびき合いの基礎部分である『関わり合い』の仕方を教えている段階である。「相手を見て発表する。」「話している相手を見て聴く。」といった基本の部分をまだ教えていくのが現状といえる。しかし、そのような実態であってもペアやグループでの話し合い、動作化などを通して、他者との関わり合いながら課題を迫及することを意識させていきたい。また、読み取りの際、想像だけにしないよう文章中の言葉を根拠にしなが話し合わせることも大切にしていきたい。

6 本時について

(1) 本時目標

『天まで とどけ、一、二、三。』と『もっと たかく、もっと たかく。』の音読の工夫について考える活動を通して、子どもたちがくじらぐもに飛び乗ろうとしている様子を想像して音読することができる。

(2) 本時展開

学習活動	指導上の留意点
<div style="text-align: center;">  <p>みんなのきもちがそろろう。</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: flex-start; padding: 10px;"> <div style="width: 45%;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ おおきなこえ ↓ みんなの上にきてほしいから。</li> <li>・ 「もっとたかく。もっとたかく。」 ↓ みんなにがんばってほしいから。 ↓ 手をつないできょうりよくした。</li> <li>・ 「もつとたかく。もつとたかく。」 ↓ みんなのきもちがそろってきた。</li> <li>・ こえをそろえる。 ↓ みんなのきもちがそろってきた。</li> <li>・ 中くらいのこえ（一かいめより 大きいこえ） ↓ こんどは五〇センチぐらい ↓ くじらぐもがおうえん。</li> <li>・ 「もつとたかく。もつとたかく。」 ↓ みんなの上にきてほしいから。</li> <li>・ おおきなこえ ↓ みんなの上にきてほしいから。</li> </ul> </div> <div style="width: 45%; text-align: right;"> <p>くじらぐも 三ばめん</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">1 「天まで とどけ、一、二、三。」 ↓ やつと三〇センチぐらい。 ↓ みんなのきもちがそろっていない。</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;">2 「天まで とどけ、一、二、三。」 ↓ やつと三〇センチぐらい。 ↓ みんなのきもちがそろっていない。</div> </div> </div>	<p>・「天まで とどけ、一、二、三。」の読み方の工夫について、ペアで話し合わせる。この時、音読をやってみるなどの工夫を促す。</p> <p>・ 全体場で読み方の工夫について発表をし、3つの「天まで とどけ、一、二、三。」の読み方の違いを共有させる。</p> <p>気づかせたいこと</p> <p>① 飛んだ高さの違い ② 子どもたちの気持ちの高まり ③ 繰り返しの表現(おおきなかぶの学習を想起して)</p>
<div style="text-align: center;">  <p>挿絵</p> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-between; align-items: flex-start; padding: 10px;"> <div style="width: 45%;"> <p>いきなりかぜが、みんなを空へふき飛ばしました。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 大きなこえ ↓ みんながとびたいと思った。</li> <li>・ こえをもつとそろえる。 ↓ みんなのきもちがそろった。</li> <li>・ まるいわになって、てをしっかりとにぎる。</li> </ul> </div> <div style="width: 45%; text-align: right;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">3 「天まで とどけ、一、二、三。」 ↓ みんながとびたいと思った。</div> </div> </div>	<p>・ 読み取ったことをもとに全体やグループで動作化や音読をし、読み方の違いを体感させる。</p> <p>・ 「もつとたかく、もつとたかく。」についても、ペアで工夫を見つけさせ、全体で工夫を共有させる。</p> <p>◎ 子どもたちが、くじらぐもに飛び乗ろうとしている様子を想像して、音読することができる。【読】</p>

## 7 実践を終えて

単元の導入にあたり、5月に取り組んだ『おおきなかぶ』の音読発表会のビデオを上映したところ、子どもたちから「もっと上手く音読ができるようになりたい。」「今ならもっと工夫して読める。」といった意見が出た。そこで、音読発表会を「単元を貫く言語活動」に位置づけ、取り組むこととした。子どもたちは『くじらぐも』を読み取る際も、常に音読発表会を意識していたため、読み取りが終わると必ず音読の練習を学校や家庭学習で取り組む姿が見られた。また、グループの中には、自主的に音読発表会前から何度も自主練習をするなど、切実感をもった取り組みをする児童もいた。このような積極的な子どもたちを中心に、「どの文の工夫を考えたいか?」「音読の練習にはどれくらいの時間があるか?」など問いかけながら、子ども主体での活動になるように心がけて単元を作ってきた。

本時については、子どもたちが工夫してみたいといった意見の中で最も多かった意見である『天までとどけ、一、二、三』の文の音読の工夫について検討することとした。この時点で、ほとんどの子どもにとって切実感のある課題であったと考える。実際の授業においても、子どもたちは読み方の工夫について既習をいかしながらたくさん発言をすることができた。また、読み取った工夫をもとに音読の練習をする際も、意欲的に楽しんで取り組んでいる様子が見られた。

単元の流れは、概ね教師の意図した流れに沿ったものではあったが、子どもたちが読み取った内容やグループ学習になったあと工夫してみたいと思ったところが次々と見つかったため、創造的な活動にもなった。

成果としては、音読発表会という共通目標があったことで、子どもたちの主体的な活動につなげることができた。また、読み取ったことをペアやグループで交流したり、実際に音読をしたりする時間を確保したことで、グループの中でのひびき合いが生まれた。課題としては、まだまだ教師の出番が多く、一問一答形式になっていることが多かった。子ども同士が発言をつなげていけるような話し合いのスタイルをもっと目指していく必要があった。その結果、ひびき合いのレベルも向上していくと考えた。